

光明小学校における中学校区説明会の報告について(概要)

- 1 日時 令和6年(2024年)5月29日(水)9時半～10時45分
- 2 場所 光明小学校4階 多目的室
- 3 内容 以下のとおり

事務局	<p>【開会】</p> <p>【管理部長挨拶】</p> <p>【教育委員会事務局紹介】</p> <p>【資料に基づいて説明】</p> <p>「1 光明小学校の児童数・学級数の推移」について</p> <p>光明小学校の子どもたちの人数と学級数が、どう推移してきたかということを表にまとめたものである。この表の一番左端が昭和54年で、この学校の開校年である。開校時は、700人を少し下回るような人数だったが、この時は全学年揃っていなかった。翌年以降は全学年揃っているため、700人を超えるような中規模から大規模に差しかかるような学校規模であった。</p> <p>この昭和54年というのは、人口急増期を対応するため、宝塚市に非常に多くの学校が建設され、隣の地域の末広小学校も同じ時期に建設された。或いは、その川を渡ったところでいうと美座小学校とか、あの辺もこの時期に建設された学校になる。</p> <p>その後、右肩下がりに子どもたちの数が減ってきて、昭和の後半から平成前半にかけて、ずっと下がってきている。ここからが少子化だと言われている時代に入って行く。少子高齢化という言葉が、出始めた頃である。</p> <p>これまで子どもの数というのは、ずっと増えてきていた。この学校ができた昭和54年よりも前、さらに昔の人口というのは出ていないが、全体的にまず増えたのが、第一次ベビーブームと言われている時である。昭和22～24年頃に生まれた方、戦後間もなく生まれた方、これが第一次ベビーブームだと言われている。一時は、260万人ぐらいが生まれたと言われている。今は100万人を切っているから、当時は非常に多かった。その子どもたちの時代というのが、第二次ベビーブームと言われている。昭和46～48年頃に生まれた年代の方々は、第二次ベビーブームということ。</p>
-----	--

その子どもたちの世代というのが、第三次ベビーブームとして来ればよかったが、第三次ベビーブームという人もいるが、それほど多くの子どもたちが生まれなかったことから、少子化と言われるようになり、昭和の後半からずっと子どもの数が減ってきた。

一方で、子どもの数は減っているが、人口そのものは増えている。昭和の後半から平成にかけて増えている。一般的に、皆様は5年ごとに実施される国勢調査で人口を知るが、1920年(大正9年)に第1回目の国勢調査があつてから、戦時中を除けば、ずっと日本の人口は増えてきていた。ところが、平成22、27年の国勢調査で人口が減ってきて、そこから人口減少時代の到来だというふうに言われている。人口は減ってきているが、大きくは減ってきていない。

ところが、この少子化を見ると、どういう現象が起きてきているかということ、子どもの数が減り、65歳以上の人口が増えてきたということ。平均寿命がどんどん伸びてきているというのが、現在の状況である。色んな医療の発達も含めてだが。そうしたこともあつて、子どもの数は減っているが、人口は維持しているので、実感的にどのように移っていくかは、分からないが、今後も子どもの数は減っていくだろうと見込んでいる。あわせて、高齢者として、永遠に生きるわけではなく、どこかで寿命でお亡くなりになってくるので、後から少し説明するが、今、宝塚市は22万5千人ぐらいの人口だが、2040年頃には17、8万人ぐらいまで減っていくと見込まれている。

「2 住民基本台帳による人口」について

光明小学校区の町丁別の人口の表である。一番上が福井町で、小林3丁目が8番と9番、小林4丁目が7番、そして光明町である。福井町だけが高司中に行くので、かつて、福井町が1、2人しかいなかった年があり、その子だけが高司中に行くということで、中学校区については課題があるというふうに言われていた。

「3 通学区域」について

これが、今の通学区域。色付けしているところが小学校区で、赤い太い線が中学校区。光明小学校区は⑩。光明小学校区の真ん中辺りに中学校区の線があるが、この左側は宝塚第一中学校区。右側が福井町で、高司中学校区になっている。ちょうど校区の真ん中を分けるように、中学校区が分かれている。これは、後から説明するが、宝塚市には、かつて小学校が24校あつたが、中山台小学校に1つ統合した学校があるので、今は23校。そして、中学校が12校。2校の小学校が1校の中

学校に進学すれば、バランスがいいが、小学校と中学校ができてきた経過がそれぞれ異なるため、うまくバランスがとれていないというのが、宝塚市の課題である。地図を見ていただくと、そういうことも見ていただけたらと思う。

光明小学校がある地域を、行政では右岸側と言っていて、武庫川の上流側から見て、右側を右岸側、左側を左岸側と言っている。大体、市役所の職員が右岸側と言うと、旧の良元村のことを言う。右岸側は比較的校区の整合が取れているが、左岸側は1つの中学校に4つの小学校から来るとか、1つの小学校から3つの中学校に分かれるということで、小学校と中学校の校区の整合が、十分にとれていないと言われているのが、宝塚市の課題である。

「4 宝塚第一中学校・高司中学校」について

進学先である宝塚第一中学校と高司中学校の学校規模である。宝塚第一中学校は、特支学級も含めて15学級で、現在456人の子どもがいる。高司中学校は14学級の323人で、子どもの数は宝塚第一中学校の方が少し多いが、学級数はほぼ同じ。特別支援学級が、宝塚第一中学校は3学級、高司中学校は5学級なので、高司中学校の方が色々な種別の特別支援学級がある。いずれの学校においても、人数において少し差があるが、適正規模の範囲内の学校と本市では位置付けている。

「5 学校の歴史」について

小学校と中学校の歴史は全然違う。小学校では創立150年という古い学校があつて、本市では、良元小学校、宝塚小学校、小浜小学校、長尾小学校、西谷小学校がこれにあたる。これらの学校は、明治維新後に学制ができて、一番始めにできた学校と言われている。

中学校は、昭和になってから、現行制度の中学校ができた。昔、中学校は高校だったので、現行制度の中学校ができたのは昭和22年。戦後、学校教育法ができたタイミングで、中学校という制度ができ、6・3・3・4制ができた。昔は、大学・中学・小学ということで、小学校の中で9年間の義務教育が構成されていた。

明治5年から22年までは、宝塚市の中でもこの辺は良元村と言われていたところだが、さらに良元村よりも前。良元村というのは、市制・町村制という明治22年にできた制度から良元村だったが、江戸時代から明治時代が変わった時は、小林村、鹿塩村、蔵人村、伊子志村から、後に言う良元村というのが構成されていた。小林小学校は明治5年から

あった。小学校と言っても、お寺の中の一角に勉強する場を設けて、学校という位置付けをしていた。そして、蔵人村には分教場ができて、後に西蔵小学校になった。少し遅れて、正業小学校が鹿塩村にもできた。いずれの学校も民家の1室を借りて実施していたもので、今のような体裁が整った学校ではなかった。

当時は、大体800人ぐらいで、1つの学校の規模を作っていこうと、1つの集落単位で認めていったというところだが、それでは財政的な厳しさがあつたことから、分校になったり統合したりということが繰り返されていた。ちなみに、伊子志村という逆瀬川から南口にかけての地域には学校がなかったの、そこに住む人たちは小林小学校に通っていた。小林・鹿塩・蔵人には、それぞれ学校があつたが、色んな統合を繰り返し、最終的には小林尋常小学校になる。そして、小林簡易小学校に統合され、良元の前身である良元尋常小学校になって、今の良元小学校に統合されたということから、当時、右岸側地域には、良元小学校1校だけだった。

それぞれの地域ごとに学校があつて、地域単位で学校が運営されていたものが、最終的には市制・町村制によって、良元小学校ができた。1つの集落ごとに学校の規模が一定維持されるようになってきて、今の校舎のようなものが建ち始めたのが、ちょうど明治22年以後だというふうに言われている。人口が少ないからというのもあり、しばらく、良元小学校1校体制が続いたが、昭和に入って、学校の動きがようやく見えてくる。

まず1つ目の動きが、旧の伊子志村の一角に宝塚第一小学校が開校となった。今の支多々川の横の場所。その後、仁川小学校、西山小学校、末成小学校、逆瀬台小学校。逆瀬台小学校は、逆瀬台のニュータウンが開発された時に合わせて建設された。

人口急増期、第2ベビーブームで生まれた子どもたちを受け入れるための学校として、光明小学校や末広小学校、美座小学校、高司小学校などがここで開校した。これが、右岸側で学校が開校されてきた経過である。良元村の中で、地域単位ということから、鹿塩村の中では仁川小学校が該当する。

次に、中学校は昭和22年からの制度であるため、創立100周年というのは中学校には存在しない。昭和22年に学校教育法が改正され、宝塚第一中学校が開校した。今の西山小学校があるところに宝塚第一中学校ができた。当時は、宝塚第一中学校と宝塚第一小学校は隣接していた。なぜ、あのように離れたところに建っているのか、疑問に思われている方もいらっしゃると思うが、そもそもは地域が隣接した地域だった。

次に宝梅中学校ができた。これは西山小学校に非常に近いところで、これを受けて、宝塚第一中学校が今の場所に移転した。元々、宝塚第一中学校があったところが、後に西山小学校になった。宝梅中学校に分かれて、この地域の校区が大きく影響するのが、昭和51年の高司中学校の開校時。この時から校区が変更されてくるということになる。宝梅中学校開校時には、校区の変更はなかったが、高司中学校開校時には、宝塚第一中学校区から高司中学校区に変更している。その後、昭和63年に光ガ丘中学校が開校した。これで右岸側の中学校が4校体制になったが、光ガ丘中学校は宝梅中学校の少し上にあることから、校区編成をするには、右岸側全域の校区変更が必要であったということである。そこで、高司中学校区の一部の地域が光ガ丘中学校区になった。

「6 中学校区の変遷」について

これは光明小学校における中学校区の変遷である。昭和50年以前は宝塚第一中学校だけ。昭和51年の高司中学校開校時には、光明小学校区全域が高司中学校になったが、光ガ丘中学校ができたことによって、光明町、小林3丁目8・9番街区、小林4丁目7番街区が宝塚第一中学校区に。福井町だけが高司中学校区に残って現在に至るのが、光明小学校の校区の変遷である。

「7 本市の課題」について

少子高齢化の進展というのは、今後も出てくる。2040年頃には、若年層、14歳から64歳までの生産年齢人口と65歳以上の人口の割合が1対1になると言われている。一人が一人を支えなければいけないという時代に、宝塚市も突入していく時に、大きな課題となるのが、生産年齢人口が多かった時代に建てられた小学校も含む公共施設をわずかな人口で、高齢者も支えながら、維持していかなければならないということである。公共施設も人と同じで、年数が経てば色々な治療なりを加えていかないといけない。これが老朽化改修工事や長寿命化改修工事である。60年ほどしかもたないものを、80年もたすための工事をしていこうというのが、長寿命化改修工事。なかなか建て替えができないから、少しでも使えるようにしていこうという考えで実施しているが、それにも大きな費用がかかる。こうした高齢者を支えるための費用負担や、公共施設を維持するための費用負担というものを、1対1の一で負担しなければならないが、本当は1対1以上の負担が、今後、若年層にのしかかってくる。そこをどう解決していくのかというのが、自治体全体の大きな課題である。公共施設の維持管理ということで、学校が深く関係するのは、宝塚

市の公共施設の 50%近くが、学校施設と言われている。そのため、公共施設の維持に一番負担がかかっているのが学校ということも一つの課題である。

2 点目は、学校教育における課題。これは公共施設の維持管理もそうだが、子どもたちが減少していく、少子化における学校の維持管理である。ここは費用的な維持管理と、教育的効果の維持管理。学校は、集団の中で色んな学び、人との関わりの中で学んでいくという大切な場である。子どもの数が減ってきた時に、そうした集団というものの機能が果たせるのかということも含めて、今後考えていかないといけないという課題がある。

後は、小中学校間の通学区域の不整合。光明小学校は 2 校に進学なので、3 校や 4 校という多さはないが、色んな引き継ぎを 2 校と調整していかないといけない。一対一であれば、9 年間見通した教育活動を展開しやすくなる。

3 点目が児童生徒数の学校間格差。宝塚市の中では、宝塚第一小学校や長尾小学校のように千人を越す規模の学校もある。全体的に規模は小さくなってきているが、宝塚小学校や長尾南小学校も決して小さな規模ではない。一部の学校では千人、或いはそれに近い、いわゆるマンモス校と言われている学校と、光明小学校のように各学年単学級の小規模校の学校が大体近くに点在しているという、そんな学校間の人口格差の問題である。これは学力格差ではないので誤解のないようお願いしたい。児童生徒数の学校間格差が出てきており、これも教育環境に幾分かの影響が出てきている。

後は、教育制度の見直し。中学校ができた昭和 22 年に 6・3・3・4 制ができたのだが、明治の当初の学制から大きく転換したのは、この時期だった。ただ、明治から昭和にかけての時代の流れ、子どもたちの環境の変化と、昭和 22 年から今日までの環境の変化というのは全く違う。タブレットを持って、自分で色んな情報を検索することができたりして、身の回りの環境も大きく変わってきている。特に、色んな研究の中で、昭和 22 年当時の子どもたちの状況と、今の子どもたちの状況を比較した時、今の 5 年生ぐらいの子が、昭和 22 年当時の中学校 1 年生と同じぐらいで、2 年若年化してると言われている。当時、中学校ぐらいになって教科学習をしたら、学習効果が上がると言われていた 12・13 歳の子どもが、今は 9・10・11 歳ぐらいだと言われている。そうしたことで、教育制度の見直しが必要ではないかと考えられている。

一定のインフラが整備されている中で、学校を大きく変えるというのはこの時代なかなか難しいのだが、平成 28 年(2016 年)に 9 年間で 1

つの学校となる義務教育学校の制度ができた。小中一貫校とは、少し趣が違う。小中一貫校というのは、小学校と中学校が連携して、9年間を見通した教育カリキュラムを作っていくという学校だから、あくまでも小学校と中学校は存在する。ところが、義務教育学校というのは、小学校・中学校という区別はなく、分けるのであれば、前期課程・後期課程で、1年生から9年生までという概念の学校である。それで1つの学校になる。昭和22年から大きく変わったのは、この義務教育の過程が変わってきたというところである。ただ、必ず義務教育学校にしなければならないということでもないので、宝塚市には、現行の小学校・中学校制度が今も残っている。ほとんどの近隣自治体も現行のままとしているが、西宮市は人口が少し減ってきている地域において、義務教育学校を導入している。関西であれば、京都市が積極的に導入しており、近隣であれば、姫路市や豊岡市とか、その辺も積極的に取り組んでいる。

後は、環境の変化への対応。この環境というのは、暑さも含めた環境で、夏季の気温が非常に高くなっていく中で、登下校中の熱中症の問題が課題となっている。宝塚市の場合は、山間部に学校があるから、坂を登っていかないといけないため、より一層体力を使うし、汗をかく。平地の移動と坂を登る移動は環境が全然違う。また、坂が比較的急であるというのも宝塚市の特徴で、そこを登っていくという健康上の問題も、今は、配慮していかないといけないという課題がある。

「8 今後の教育改革」について

こうした課題を受けて、今後、教育改革をどのように進めていかないといけないのかというのは、まず、小中学校間の通学区域の整合である。

歴史的には、小学校が町村単位・集落単位でできていたものが、明治6年あたりから合併を繰り返し、良元小学校や宝塚小学校、小浜小学校、長尾小学校、西谷小学校ができてきた。そうした地域性を重視した学校区から、中学校も当然地域性を重視してきたが、小学校とは整合がとれていないという問題があった。

今度は中学校を中心として、校区編成を組んでいく必要がある。それは、今言ったように、9年間を見通した教育活動を展開するためには、小学校区と中学校区を整合していく必要があり、そのことを(1)(2)に書いている。

「9 段階的に着手(案)」について

今後の教育改革の方向性ということで、それを具体化していくためにどういうふうにしていくのか、これを、校区の問題で一気に進めるのは難しいので、段階的に着手していきたい。

中学校を中心とした小学校の配置で、光明小学校全域を高司中学校校区に編入するとともに、経過措置を設けるとというのが、段階的な着手の1つである。大半の校区は宝塚第一中学校だが、先ほど説明した環境の問題、宝塚第一中学校まで非常に遠いという通学途上の問題があるということ。昔は学校ができた時の人口配分によって、一定の校区の線引きがあったが、今は子どもの数も一定落ち着いてきている。今後も子どもの数が減少していくということを考えれば、今の高司中学校の学校規模であれば、十分に受け入れが可能である。また、距離的に近く、かつて同じ集落だったということ踏まえた校区とすることで、高司中学校に移るということである。

ただ、兄弟関係や色々な思いもあったりすると思うので、経過措置を設ける。高司中学校校区とするが、保護者からの申請に基づいて、宝塚第一中学校にも就学できるように、就学学校の変更を許可するということである。「許可する」という表現で資料に書いているが、意図的に「許可する」という表現を使った。法律上の言葉をそのまま使っている。

通常、市域を決める時は、住民の意向を重視して議会の議決が必要になってくる。住民の意向を重視して市域というのが決められてくるが、校区は、法律上、そうっていない。教育委員会が自由に変更できる規則で決めている。そのことから、校区変更というのは、教育委員会にかけてということで、行政側で変更することができる。その根底になっている法律が学校教育法施行令第五条に規定されており、教育委員会の所管する地域の中で、2つ以上の学校がある場合は、教育委員会は、就学する学校を指定すると規定されている。通学区域の指定に関する規則があって、住所ごとにどの学校に就学するかということが規定されている。そして、就学通知書というもので、皆さんに就学先の学校や入学式の日付をお知らせしている。このように、教育委員会が一方的に決めるというようになっている。そのため、あえて許可するという言葉を使った。

ただ、今の時代、その考え方もどんどん変わってきており、できる限り保護者の意向も注視しながら、学校を指定しなさいというようになっているので、皆さんのご意見を聞きながら、具体的な方向性を決めていきたいと思う。

この経過措置の期間について、自分の子どもがどうなるのかと、皆さん、心配されると思う。これは、光明町、小林3・4丁目に住んでいる方々

には、影響がない期間を設定しようと考えている。今、生まれている方で、宝塚第一中学校に行きたいと言われる方は、申請していただければ、就学学校の変更を許可する、というような手続きをとっていきたいと思う。

宝塚市内には、そういう地域が幾つかある。この近所では塔の町で、本来、良元小学校—宝塚第一中学校だが、申請すれば、西山小学校—宝梅中学校に通学できる。他には、御殿山4丁目、すみれが丘小学校—御殿山中学校だが、小学校については、宝塚小学校に行くこともできる。そして、中筋山手にも長尾小学校区、中山台小学校区の選択ができる地域がある。まだ細かい地域でいうと幾つかあるが、宝塚市の中では10ヶ所に近いほどの地域で、この校区選択制というのをうっているため、決して珍しい取扱いではない。今回は、経過措置としてこういった取扱いをしていこうということである。

「【参考】について」

光明小学校の中学校区の変更前と変更後の地図である。現在、光明小学校の中学校区が分断されている。これを直すと、変更後(案)になる。この末成小学校区、光明小学校区、高司小学校区全員が、光明小学校区の子は宝塚第一中学校を希望されなければ、高司中学校に通学する。

さっきの経過措置の補足説明だが、福井町は元から高司中学校だが、お友達の関係もあると思うので、福井町も含めたこの光明小学校区全域で、しばらくの間、宝塚第一中学校まで就学できるという経過措置を設けていきたいというのが、今回の提案である。

先ほど、教育委員会の会議で議決を取って、校区変更の決定ができると説明したが、その手続きは今後の予定である。それは、今日も含めて皆様方のご意見を聞く中で、適切に対応していきたいと考えている。

※ 事務局からの説明は以上。